

第三章 弥生時代

第一節 弥生時代概説

一 水稲農耕社会の成立

日本列島で本格的な水稲耕作が始まった時代を弥生時代という。水稲耕作はそれ以前の縄文時代の狩猟・漁労・採集及び限定的な食用植物の栽培に比べて、安定的な食糧生産を実現したことから、列島の各地に急速に広がり、道具の生産や生活様式・社会の仕組みなど様々な事象を革新することとなった。その革新が、次の古墳時代には国家の誕生へと結実していくのである。

本節では稲作の伝来とその背景、各種の道具、集落と墓地の様子、集団の変化など、弥生時代全般にわたる文化的・社会的事象について概説していく。

弥生時代の 日本の歴史を振り返ると、奈良時代以降には時期と区分 代の始まりを明確な年数で言い表すことができず、古墳時代以前となると文献に記載された資料などもなく、確実な西暦年数は不明である。弥生時代についてもその始まり

は一般的に紀元前四〜五世紀ごろとされているが、一部では放射性炭素(C¹⁴)の理学的な年代測定を根拠に、開始時期を数百年さかのぼらせようとする研究者もいる。一方、弥生時代が終了する時期は、古墳時代を象徴する定型化した前方後円墳が出現する三世紀中ごろ〜後半と考えられている。つまり、弥生時代全体としては約七〇〇年前後の期間を占めていたことになる。

この長期間にわたる弥生時代の歴史をみていく際に、いくつかの時期区分がされている。最近では早期(紀元前五・四世紀〜紀元前三世紀)・前期(紀元前三世紀〜紀元前二世紀)・中期(紀元前二世紀〜紀元後一世紀)・後期(紀元後一世紀〜三世紀)の四時期に分ける見方もあるが、ここでは現在一般的である早期と前期を合わせて前期とする三時期区分でみていくこととする(図2-35)。なお、中国の洛陽焼溝(かんば)漢墓から出土した銅鏡や貨泉などの遺

年代	500	400	200	100	B. C.	A. D. 100	200	300			
時代	縄文時代		弥生時代					古墳時代			
時期	晩期		前期		中期		後期		前期		
土器	夜白式		板付Ⅰ式	板付Ⅱ式	城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三瀧式	下大隈式	西新式	布留式

図2-35 弥生時代の時期区分と北部九州の土器

物が、北部九州の甕棺墓に副葬される状況を対比させて、甕棺の型式を西暦年代に当てはめた研究がある（橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告31』福岡県教育委員会、一九七九）。これは弥生時代の各時期の年代を決定する重要な指針となっている。

大陸の情勢

日本は東アジアの東端に位置し、海によって独立した列島を構成しているが、大陸や朝鮮半島の動向は非常に重要な要素であり、たとえ弥生時代という古い時代においても列島内の時代の変遷や文化の内容に大きな影響を与えている。そのため、ここではまず弥生時代前後の時期の大陸の歴史を概観することとする。

列島で弥生時代が始まった紀元前五〜四世紀は、大陸では春秋時代から戦国時代への時代の転換期に当たる。紀元前一〇五〇年ごろ殷を滅ぼし武王が建てた周は、犬戎の侵略を受けて紀元前七七〇年東の洛邑（成周）に遷都する。この遷都とともに春秋戦国時代が始まる。春秋期には周室は次第に衰えてその権威を失い、諸侯は互いに併呑を繰り返して戦争が絶えなかった。その中で春秋の五覇（齊の桓公・晋の文公の他に、異説があるが秦の穆公・楚の莊王・宋の襄公・呉の夫差・越の勾践）があげられる）が周室に代わって諸侯を総攬する時期が続いていく。その後、紀元前四〇三年晋の大夫韓・魏・趙の三氏が晋を分割して独立し、諸侯に封じられてから戦国期が始まる。こ

の時期は春秋期にも増して弱肉強食・下克上の感が強くなり、戦国七雄（秦・楚・燕・齊・趙・魏・韓）の諸国が勢力の拡大を競い合っている（図2―36）。春秋戦国時代の諸国は宗廟を

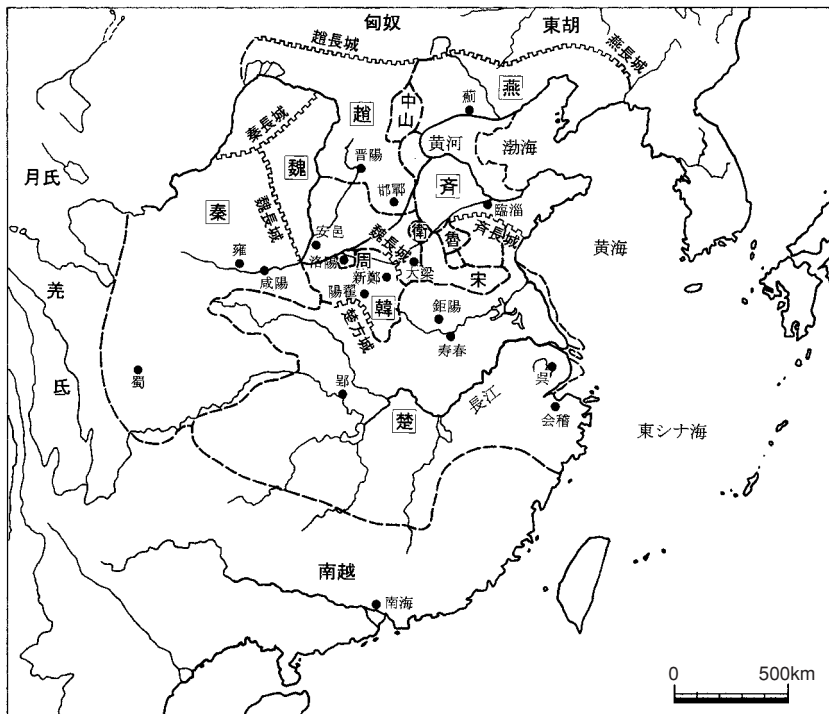


図2―36 紀元前四世紀の中国大陸

中心とした数^①の範囲に広がる市街地を、他国の侵略から防御するために高い城壁で囲む都市を建設している。

春秋戦国時代の約五五〇年間にわたる戦乱は、紀元前二二一年秦王政（始皇帝）の統一によって終結する。始皇帝は中央集権的な政策を進め、厳格な法律の整備・度量衡の統一などを行う。また、地方の直接支配をめざして軍隊の迅速な移動を図るために、黄河流域を中心に直線的な規格道路「直道」を整備し、北方や西方からの異民族の侵入を防ぐためにいわゆる「万里の長城」の大増築を実施している。

始皇帝の没後、秦の圧政に対する庶民の不満が爆発し、早くも紀元前二〇二年には劉邦（高祖）が楚王項羽を倒して漢（前漢）を建国する。漢は約二〇〇年間続くが、紀元後八年に新都侯王莽に篡奪された新にとって代わられる。しかし二十五年には前漢景帝の六世の孫劉秀（光武帝）が新朝を滅ぼして、漢（後漢）を再興する。後漢も約二〇〇年間にわたって栄えるが、宦官の台頭による朝廷内部の腐敗や、各地に広がった黄巾の乱への対応で衰亡していく。

秦から漢へと約四四〇年間続いた統一の時代は、二二〇年の曹操による魏の建国、続く二二一年の劉備の蜀、更に二二二年の孫権の呉の建国によって、再び戦乱の時代へと向かうことになる。この三国時代は二八〇年の魏の権臣であった司馬炎によって建国された晋によって統一される。列島内で弥生時代か

ら古墳時代へ移行する時期が、大陸ではこの三国時代にあたっている。

一方、朝鮮半島では紀元前一〇八年に前漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして北部に楽浪郡を設置する。後漢末の紀元二〇四年ころになって楽浪郡を支配していた公孫康はその南半を割いて帯方郡を置くが、三二三年には楽浪郡は高句麗に滅ぼされる。また、この時期南部では馬韓・弁韓・辰韓の三韓が部族国家を形成していた。

稲作の伝来

大陸では新石器時代に入ると、七〇〇〇年以上前に北部の黄河流域に広がる黄土高原で粟の栽培が始まる。河北省の磁山遺跡では七四〇〇年から七二〇〇年前ごろに属する食料の貯蔵穴が約三〇〇基発見されている。黄河流域の山東省北辛遺跡や、東北地方の遼寧省新樂遺跡でも七〇〇〇年から六〇〇〇年前の農耕に伴う遺構や遺物が発見されている。

稲の原産地はかつてアッサム地方や雲南省付近であると考えられていたが、近年では長江流域の発掘調査成果から、その中・下流域が稲作農耕の起源地とする説が有力になりつつある。浙江省河姆渡遺跡は七六〇〇年前の稲作遺跡として良く知られており、コメとともに骨製の耜・木製の鏟などの水稲農耕具と木器製作用の石斧が出土している。近年これよりも更に古い稲作の遺跡が湖南省で発見されており、彭頭山遺跡は一万年

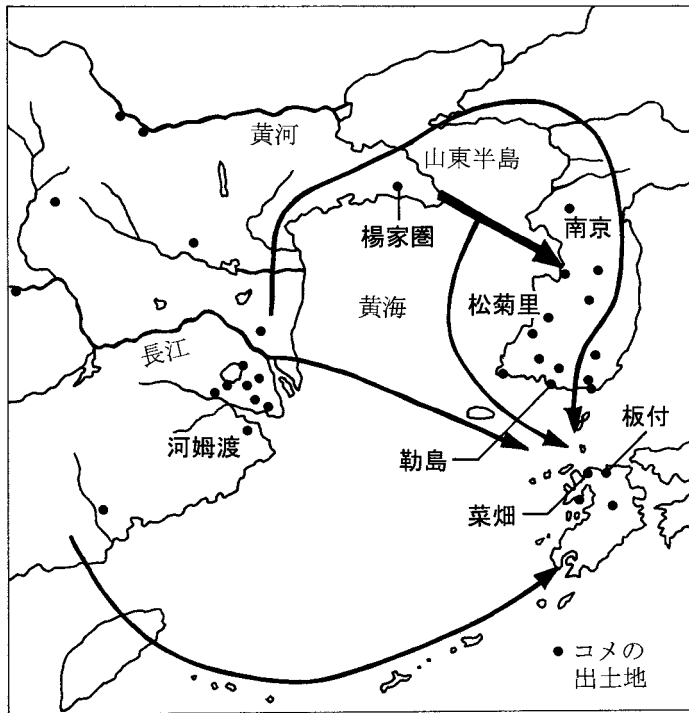


図2-37 稲作伝来の推定経路

前、八十垺遺跡では八〇〇〇年以上前と考えられている。稲作農耕文化は、四三〇〇年前には長江下流域から北部の山東半島に広がり、朝鮮半島北部へはコマ形土器文化の段階に伝わる。半島南部への伝播は無文土器文化の段階になり、松菊里遺跡で発見されたコメは二六〇〇年前のものである。列島内の北部九州の沿岸部に水稲耕作が伝播したのは、縄文時代晩期

後半の時期である。なお、伝来のルートについては、これ以外にも山東半島から遼東半島經由で朝鮮半島に及んだとする説や、長江下流域から直接列島に伝来したとする説、南西諸島を經由したとする説などがある(図2-37)。ただし、北部九州の初期の稲作に伴う石器などは朝鮮半島南部との類似性が強いようである。

先述した大陸の歴史的背景と稲作農耕の伝来ルートを合わせて考えると、紀元前五世紀、大陸における春秋末期から戦国初期にかけての動乱が朝鮮半島へも影響を及ぼし、半島南部の無文土器文化に属していた人々の一部が水稲耕作の技術と文化を携えて北部九州に渡来したと想像される。

北部九州の玄界灘沿岸に伝来した稲作農耕は、当初渡来人によって海浜部で試行されるが、内陸部に居住する縄文人に受け入れられるまでに多くの時間を要さなかった。そして弥生時代の早い時期に急速に西日本の各地に広がる。鹿児島県下原・中ノ段遺跡、宮崎県学園都市遺跡、山口県延行遺跡、岡山県津島江道・沢田遺跡、愛媛県大洲遺跡、香川県林坊城遺跡、大阪府牟礼遺跡などがこの時期の遺跡である。その後、弥生時代前期の中ごろには関東地方から東北地方にまで波及している。青森県砂沢遺跡では、前期末の水田跡も発見されている。

なお、コメの品種はインディカとジャポニカに大別されるが、列島に伝来したのはジャポニカである。また、ジャポニカ

にも温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとがあるが、古くは熱帯ジャポニカも栽培されていたらしい。

初期の水田 稲作の具体的な証拠となる水田は、一九四七と農耕具 五〇年に静岡県登呂遺跡の調査で発見された。

しかし、この水田は弥生時代後期の比較的新しい時期のものであった。その後、弥生時代初期の水田が一九七八年に福岡市板付遺跡で確認され、縄文時代晩期末の突帯文土器単純期のものと判明した。この水田は畦畔の両側に杭を打ち込み、横板を渡して補強し、水田の東

側には幅約一畝の広い畦畔と大水路が掘られ、井堰によって水田へ灌漑するようにになっている(図2-38)。このように板付遺跡の水田は水路・井堰・取排水口を備えた極めて完成度の高い水田であった。同時期の水田は佐賀県唐津市菜畑遺跡や福岡市野多目遺跡でも発見されている

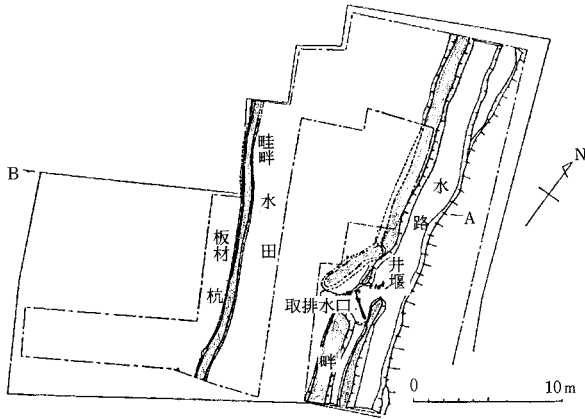


図2-38 板付遺跡の灌漑施設

が、同様に杭や矢板で保護した畦畔と灌漑施設をもつ完成されたものであった。

弥生時代の水田の灌漑方法には河川を利用する場合と溜池によるものがあるが、後者は時期的に遅れて利用されるものと考えられている。古墳時代の巨大な前方後円墳は満々と水をたたえた周濠を備え、その水が水田の灌漑に利用されていた。弥生時代では沖積地に立地する大規模な環濠集落には環濠に水を通していたと考えられるものがある。甘木市平塚川添遺跡や大阪府池上曾根遺跡などでは「環濠の一部が自然河道にかかる場合には、灌漑施設としての機能を想定しても良いのではないだろうか」(黒沢浩「弥生・古墳時代の農業」『産業工狩猟・漁業・農業』考古学による日本歴史2、雄山閣出版、一九九六)とする見解もある。

弥生時代の水田には区画の大きなものと、それを更に小さく分割したものがあるが、登呂遺跡の水田は一枚が二〇〇〇平方畝以上のものである大きい区画の水田である。しかし一般的には五〇平方畝未満の小さいものが多い。栽培方法の一例として、岡山市百間川の原尾島遺跡では、検出された稲の株跡に規則性がみられたことから、直接田に種籾をまく直蒔きだけではなく、田植えを行う技術があったことが推定されている。

弥生時代初期の遺跡から出土する農耕具は太形蛤刃石斧(図2-39・2)・扁平片刃石斧(同・1)・柱状片刃石斧・石庖丁

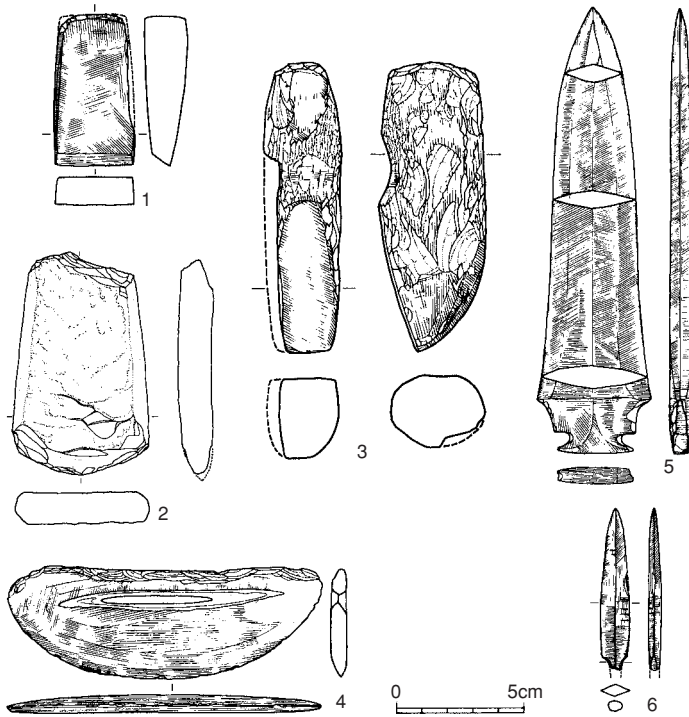


図2—39 大陸系磨製石器

などの大陸系磨製石器や木製農具など、縄文時代にはなかった新しい道具によって構成されている。これらの道具のうち、大陸系磨製石器は朝鮮半島南部の遺跡から出土するものと類似し、特に挟入柱状片刃石斧(図2—39・3)・有柄式磨製石剣(同・5)・柳葉形磨製石鏃(同・6)や、擦切すりきり技法による孔を施す石庖丁(同・4)などは列島と半島南部に限定される石器

である。

土器については、壺・甕・高杯・鉢に機能分化した器種が使用されているが、このうち甕・高杯・鉢は従来の縄文時代晩期の深鉢・浅鉢からの変化がたどれる。しかし、壺は新しく導入された器種である。

弥生人

弥生人骨は九州北部と山口県西部地域で比較的多く出土しているが、これらの地域では二つのタイプの弥生人がみられる。福岡県・佐賀県・熊本県の平野部と山口県の西海岸に分布する北部九州タイプは、顔の高さが高く、鼻が低く、顔は全体的に扁平である。身長は男性で一六二〜一六四センチ、女性で一五〇センチ程度と高い。これに対して長崎県・佐賀県・熊本県の海浜部の遺跡から出土する西九州タイプは顔の高さが低く、幅が広く、鼻が高く、全体的に彫りが深い。身長は男性で一五八センチ、女性で一四八センチとやや低い。この西九州タイプの弥生人は縄文人の特徴を備えることから、その子孫と考えられている。北部九州タイプの弥生人は、稲作農耕文化を携えて渡来してきた人々の子孫で、在地の縄文人との混血もあまり行われなかったとする人類学的見解もある。

縄文時代以来、出土人骨をみると抜歯の風習が盛んであったことが分かる。北部九州タイプの山口県土井ヶ浜遺跡で発見された人骨には七〇%以上で観察されているが、抜く歯の部位が西九州タイプの人骨とやや異なることが分かっている。また、

四肢骨は北部九州タイプの方が西九州タイプよりも相対的に大きく頑丈である。これは農作業が狩猟活動よりもはるかに重労働であることに起因していると考えられている。

このように、同じ稲作農耕を行う「弥生人」のなかでも、渡来人と縄文人との混血の度合いは地域によって格差があった。しかし、この格差も二〇〇年余りを経過して稲作が列島各地に受容される中期になると払拭されていくようになる。

二 道具と製作技術

弥生時代は稲作農耕という縄文時代にはなかった生業が普及したことから、これに伴う新しい道具が伝来し、改良されるようになる。それは土器・石器・木器・金属器などさまざまな素材の道具に及ぶが、ここでは用途ごとに概観していく。

土 器

明治十七年（二八八四）東京本郷区弥生町の向ヶ岡貝塚で従来の縄文土器とは違う赤焼きの土器が発見された。この出土地の名称から弥生土器の呼称が誕生した。弥生土器は縄文土器と同様に、轆轤ろくろを使用せずに粘土紐を積み上げて成形し、六〇〇〜八〇〇度ほどの温度で野焼きして製作するもので、それ以前の縄文土器に比べて明るい赤褐色ないし茶褐色を呈する。

弥生土器の製作技法は、壺では表面をヘラ状の工具で磨いたり、指や皮などで横方向になでたりして表面を仕上げる場合が



写真2-4 弥生土器の器種
1 - 壺、2 - 甕、3 - 器台、4 - 高杯